



Title	退職にあたって
Author(s)	野村, 祐子
Citation	北海道大学大学院農学研究科技術部研究・技術報告, 9, 33-34
Issue Date	2002-03
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/35435
Type	other
File Information	9_p33-34.pdf



生物資源生産学専攻 畜産資源開発学講座 野村 祐子

長いようで短く短いようで長い勤務を終えようとしています。ほっとすると共に一抹の寂しさもあります。私が勤務した昭和 38 年には当教室は畜産製造 2 という名称で、畜産学科の中でも皮革の研究をし、牛馬豚皮のタンニン鞣し、クロム鞣しの研究開発が行われ、製品にした後、使い勝手の良い皮革をと目指していました。教室には先生級の技官がおられ工場カリキュラムに添って実習を指導し、実験実習と毎日工場がフルに動いていました。実験室では皮粉を使った化学分析等が行われ、実験補助的な仕事を教えてもらいました。厳しい教授でしたが、試薬の知識、試薬棚への配列保管の仕方など文系の短大を出たばかりの私には驚くことばかりでした。実験室では最低これだけは覚え守るべき事を教わりました。

1. 実験台上のガラス器具や、他の器機類を断りもなく触り、置き場所を変えないこと。
2. 実験室内を清潔に保つこと

整理整頓は元より埃を持ち込まない。汚い実験室からは正確なデータは出ないと言われたことが妙に頭に残っています。その後、教室の名称も皮革製造と変わりました。この頃より皮革と平行して毛皮、哺乳動物の毛の構造研究に先生方が取り組まれ、私も末端の方で入れてもらいました。

昭和 52 年に教室に日本電子の走査型電子顕微鏡 T-20 型が入り画期的なことでした。早速、学生の卒業論文に、羊毛が熱処理によってどう変化するか、酸化染料、アルカリ染料では、時間を追っての変化の仕方を電顕写真で見えていきました。撮影したフィルムの現像や焼き付けも習い、何本もネガを持って暗室に入り、時間の経つのも忘れて夢中で焼付をしました。慣れてくると期待に答えキレイな写真をと、試料の作製、撮影現像焼付の方法に注意を払い何回も試み、焦点深度が深く鮮明でピントが合っているか、明度彩度がきつくない写真をと習いました。しかし難しく何十枚に 1 枚がまあまあの出来という結果です。

世の中が豊かになって来たせいか、ミンク、キツネなどの毛皮の需要が高まり毛皮の品質が問われ始めました。衣料としての毛皮の品質は、毛色、毛質及び皮部の性状等によって評価されています。

当教室でも鞣しの工程で軽く弾力性に富んだ毛皮をと実験が繰り返されていました。毛色は遺伝の分野で教室では出来ないが、染色や光による変褪色の検討、毛質の検討には毛の密度が大きく関わっていることが判明されました。そこで、脱脂したミンクの生皮を凍結ミクロトームでカットし、顕微鏡下で一定面積当たりの毛穴の数をかぞえ、次に電子顕微鏡で毛包群を捉え、一個の毛穴から生えている刺毛と綿毛の数

をかぞえました。密度の算出は単位面積当りの毛穴数と毛包群当りの毛の本数から算出しました。毛の密度は同じ種であっても固体により、又部位によっても大きな差がありました。

皮部の性状は、特に毛皮の皮の厚さが製品重量との関係から重視されているので、毛を除去することなく皮の厚さの測定が出来る方法を教授が考えだしました。脱脂後の生皮に対して皮の厚さを測定する為に先端部にシリコン樹脂を固定させた待ち針を用い、針を毛皮表面より透入させると皮を通過する際の抵抗によって針先の樹脂が押し上げられ、針の金属が露出します。この針の露出部分を光学顕微鏡下で接眼マイクロメーターを接し測定しました。その結果ミンク皮の厚さは

- ・部位によって異なり背面が腹面より厚く臀部に向かって薄くなる
- ・皮の厚さは個体間で大きな差がある。雌雄の比較では臀部を除く部位で雄皮の方が有意に厚かった。

この実験には釧路のミンク飼育場の協力を得て、何年にも渡り多くの実験データを取りました。上記に述べた、「これらのデータは生データとして大変貴重なもので、これからの自分の仕事にも必要なので大事にします」と、前年度退官された教授が述べられ、私にとっては大変嬉しい事でした。

近年は副生物利用学分野と名前も変わり大学院生や留学生が多くなり技官の仕事内容も一段と難しく専門性が問われてきています。私達は農学部それぞれの場所で色々な仕事をしています。個々には何程の事も出来ませんが毎日止まることなく着実に仕事をして積み重ね、纏め、実にしていくことにより、教官や学生への協力となり、教室へ身を置く私の勤めだと思ってきました。

ここ10年程前より技官も組織化され、技術の向上や待遇の改善のため研修会が活発に行われました。私も色々勉強させてもらい技官としての認識を新たに致しました。これからは、日常の仕事や研修会を通し、より専門の知識を身につけた人々が多く成長され、充実した技術部に成ることと思っています。そして技術部の益々の発展と皆様の御多幸を心より願っております。長い間お世話になり有難うございました。